

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18791660
 研究課題名（和文） 出産後の母子と家族の育児を支援する継続看護プログラムの開発と実践
 研究課題名（英文） Nursing practice and development of a child-rearing support program for mother-infants and families after birth
 研究代表者
 氏名（ローマ字）：前原 邦江（MAEHARA KUNIE）
 所属機関・部局・職：千葉大学・看護学部・講師
 研究者番号：00302662

研究成果の概要：出産後 1～4 か月の母子を対象に、ふれあいを通して母子相互作用を促す看護介入プログラム、及び、家族向けパンフレットを用いて母親を介して家族の関係性に働きかける看護援助を実践した。プログラム参加後、母親のわが子との相互作用の自信や楽しみが増大するという変化が認められた。さらに、乳児期を通じた育児支援活動を実践した。参加者の評価から継続的な育児支援のニーズ、及び、プログラム内容・運営への示唆を得た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	1,400,000	0	1,400,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	360,000	3,660,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：育児支援、母子相互作用、乳児、家族、看護

1. 研究開始当初の背景

近年の少子・核家族化を背景に、過去に乳児と接した経験のない親の増加、地縁・血縁によるサポートの脆弱化、子育ての伝承性の喪失が起こり、出産後間もない時期の母子と家族への継続的な育児支援の必要性が増大している。

出産後 1～2 か月頃の母親は育児上の問題や心配事が多く、泣いて何を要求しているのかわからないなど子どもとのコミュニケーション上の困難が育児不安の一因となっている。子どもの合図への敏感性と応答性は親子関係形成に重要な意味をもつ。また、わが子との相互作用の肯定的な経験は母親の

自信を高め、わが子との相互作用の楽しみを増大させると考えられる。また、分娩施設を退院後は、新たな家族関係の形成と地域生活への移行が課題となる。現在、医療保健機関および地域において様々な育児支援が実践されているが、最近の社会背景や入院期間の短縮化に伴い、分娩施設を退院後の母子と家族の適応および地域生活への移行を促進するための継続した看護の必要性が高まっている。そこで、出産後間もない時期から地域生活への移行期に着目し、母子への継続看護の視点から看護実践を再考し、プログラム開発につなげる必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、出産後の母子と家族を継続的に支援するための看護プログラムを開発、実践すること、その評価から参加者のニーズに合った支援プログラムへの示唆を得ることである。

本プログラムは、分娩施設を退院後の母子と家族の育児への適応および地域生活への移行を促進することを目標とし、母子相互作用に焦点をあてた看護介入（第1段階）とピアサポート活用による継続看護（第2段階）で構成する。

3. 研究の方法

(1) 母子相互作用に焦点を当てた看護介入プログラムの開発と実践

① ふれあいを通して母子相互作用を促す看護介入プログラムの実践と評価

対象：

本プログラムの対象は、出産後1～4か月の母親と乳児である。2つの病院の産科病棟・外来でパンフレットを配布または掲示し、参加者を募集した。研究の趣旨説明の後、同意した者を参加者とした。

研究方法：

プログラム開始前（介入前）と第4回目終了後（介入後）の2時点で、無記名の自記式質問紙を配布し、回収箱および郵送法で回収した。質問紙には、背景要因および、母親の自己評価を表す4件法で回答する選択型質問項目、母親が認識した参加後の母子の変化を自由記述する項目などである。また、プログラム参加の満足度、終了後の感想や意見を自由記述で尋ねた。介入前後の回答の変化を検討した。また、グループディスカッションは、研究者がファシリテーターとして参加観察し、書き起こした逐語録とフィールドノートをもとに参加者の反応から評価した。

倫理的配慮：

本研究および看護介入プログラムは、研究者の所属する大学の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。参加者には、研究の趣旨と方法、匿名性と自由意思の保障、研究者が助産師として本プログラムを実施すること、プライバシーおよび個人情報の保護、研究データの取り扱いに関する配慮などについて説明し、参加者の同意を得た。参加者と研究者が共に同意書に署名した。

② 評価指標の検討

母親の発話の観察：

母子相互作用における母親の行動観察から評価するための指標の一つとして、母親の発話の数と内容を検討する。研究者の先行研究において、産褥早期の母子の授乳場面を観察し逐語録に書きおこした既存データから、母親の発話を抽出した。発話の単位は一文と

し、意味内容ごとに分類した。場面の状況や文脈をふまえて各事例の発話数や経日的変化を検討した。母親の発話を観察の視点として用いる際の内容の解釈や影響要因について考察する。

母親の自己評価に関する質問項目：

母子相互作用および母親の育児への適応を評価する指標について文献検討を行う。

(2) ピアサポート活用による継続支援プログラムの実践と評価

① ピアサポート活用による継続支援プログラムの実践と評価

対象：

本プログラムの対象は、出生後4か月から1歳ごろまでの乳児と母親である。出産後1～4か月時に、ふれあいを通して母子相互作用を促す看護介入プログラムに参加した母子に対して、その後の乳児期における支援プログラムへの参加を呼びかけ、ピアサポート活用による継続支援プログラムへの参加者を募集した。また、その対象者の紹介により、新たな参加者を募集した。研究の趣旨説明の後、同意した者を参加者とした。

方法：

プログラムの終了時に、母親を対象にプログラムへの参加理由、良かった点、参加後の母親自身の変化、意見・感想などを自由記述する無記名の質問紙を配布し、回収箱または郵送法で回収した。データは意味内容の類似性・異質性により分類し、集約・整理した。

② ピアサポートによる相互的・継続支援のための交流の場の提供

本プログラムでは、第1段階のプログラムへの参加者が、その後の参加者にとってのピアサポーターとして相互的な支援に発展するような交流の場を提供する。先輩ママからのメッセージおよび活動紹介を行い情報発信するためにホームページを作成し運営する。

4. 研究成果

(1) 母子相互作用に焦点を当てた看護介入プログラム（第1段階）の開発と実践：

① 看護介入プログラムの実践と評価

本看護介入プログラムの目的は、研究者らの先行研究に基づき、母子相互作用を促し、わが子からの肯定的な反応を体験することで、母親の自信を高め相互作用の楽しみを増大させること、および、ピアサポート形成を促すことである。プログラムは、インファンとマッサージの手法を用いた触れあいの実習と、母親同士のグループディスカッションである。5組程度の小グループ制で、1回あたり2時間程度、計4回シリーズである。な

お、この時期の乳児は安静覚醒状態が短く、児の状態や授乳によって、全員が同時に実習を行えない場合があるが、母親には児の要求に応答することを優先してもらい、4回シリーズの中ですべての内容を網羅できるように復習の時間を含めて構成している。会場は大学内に設置された家族支援室であり、家庭的な雰囲気の中で安全・安楽に過ごせるように環境を調整する。また、母親を介して夫婦/両親間の関係、両親と祖父母との関係、家族と社会の関係性に働きかける看護援助の方法について先行研究を基に検討し、両親、上の子ども、祖父母向けの3種類のパンフレットの使用許諾を開発者から得て、グループディスカッションの際に活用した。

母親の自己評価について、介入前後の回答の変化を分析した結果、わが子の合図をよみとり世話行動をする自信が高まったこと、子どもとの相互作用の楽しみが増大したことが示唆された。本プログラムによる効果の表れ方は母子の個別性が影響しており、事例によっても異なるが、多くの母親が、わが子との相互作用の自信と楽しみが増えたという変化を認識していた。また、本プログラム参加の満足度は高く、専門家の支援とピアサポートを活用できること、さらに継続的な支援の場を求める意見があった。

プログラム終了後の質問紙調査の結果、参加理由は、子どもの健康や発達の促進および子どもとのコミュニケーションなどのマッサージそのものへの興味と、同じ月齢の子どもをもつ母親同士で話をして仲間づくりや気分転換を図りたいという意見が多かった。参加後の母親自身の変化としては、コミュニケーションの促進や子どもの反応への敏感性、愛着の高まり、子育ての楽しみと自信が挙げられた。これは、プログラムの目的である母子相互作用を促し母親の自信を高めることに対する母親の反応が表れており、母親自身が認識した変化の側面から目標が達成されたと考えられる。また、良かった点として、インファントマッサージの習得の他に、他の母子と交流して仲間作りができたこと、悩みが解消されたことが多く挙げられた。これは、プログラムの目的であるピアサポートの形成と活用が行われたと評価できる。このプログラムへの参加が出産施設を退院後、子どもと二人での初めての外出だったというケースも比較的多く、出産後の母親が家庭の外に出て地域の育児支援サービスにアクセスする最初のステップとして役立てられたと思われる。運営に関する意見では、ゆったりとした雰囲気や安心できる環境、ゆとりをもたせた時間の設定、少人数制であったことの満足度が高かった。本プログラムは少人数制であり、出産

後間もない時期の母子に助産師が個別の看護援助を提供できることや、毎回同じメンバーで体験を共有することから親密感が生まれ安心して仲間づくりができるなどの特徴がある。乳児期初期には睡眠覚醒リズムや授乳の間隔が短いため、このようなプログラムに参加する際には、途中で授乳やおむつ交換、泣きなどの子どもの要求に対応できることが条件となる。時間設定にゆとりをもたせ、それぞれの子どものペースに合わせた進行を行い、母親たちがいつでも子どもの要求に応答できるような配慮が必要であろう。出産後間もない時期の母親は精神的に敏感になっているケースもあり、安心して過ごせる受容的な雰囲気づくりや、ディスカッションにおいても看護職者が中立的な立場に立ち、個々の状況やその人なりのやり方を尊重する姿勢が求められる。さらに個別のニーズにも柔軟に対応するためには、グループの人数やスタッフの人員配置が必要であろう。

②評価指標の検討

母親の発話についての検討：

産褥1～6日目の母子の授乳場面(27場面)における母親の発話の内容を質的に分析した結果、子どもの様子を描写する、子供に問いかける、子どもの行動や反応をよみとり、世話行動に伴って掛け声をかける、子どもに応答する、等の10カテゴリーに分類された。事例検討により、母親の発話には個別性があり、場面の状況や母子の状態が影響すること、また母子関係を評価する際には非言語的なコミュニケーションと併せて観察する必要があることが示され、観察の視点として発話を分析する際の解釈や影響要因について示唆を得た。

母親の自己評価に関する質問項目：

プログラム参加前後の評価指標として、自記式質問紙調査を用いた。母親の自己評価を測定するための質問項目のうち、産褥期における母親役割の自信尺度と母親であることの満足感尺度(前原ら,2005)については、本尺度の特性に適した使用が必要であり、将来の研究に活用される際の研究者向けの手引き書冊子を作成した。

(2)ピアサポート活用による相互的・継続支援プログラム(第2段階)の実践と評価

①ピアサポート活用による継続支援プログラムの実践と評価

本プログラムでは、母親同士の交流および、母乳育児、ベビーサイン、子どもの発達を促進するかわり等をテーマとした支援活動

(5～14か月児、のべ41組以上、計6回)を実践した。当初は、母親仲間の交流を広げる

ことを目的としていたが、その際のプログラムの評価や今後の支援活動への要望をアンケート調査した結果から、子どもの成長発達に伴って母親たちの育児の心配事の変化しており、専門家の助言や先輩ママの実体験に基づく具体的な情報を求めていることが明らかになった。そこで、テーマを設定した講義等を取り入れ、乳幼児とのコミュニケーション技法の一つであるベビーサイン、母乳育児や補完食（離乳食）に関する講義を行った。講義の後に、母親同士で近況報告や情報交換をするグループディスカッションを行い、ピアサポート活用の機会とした。参加者自身も支援する側の役割を担うという意味で、その後家族支援室を訪れる母親たちに向けて「先輩ママからのメッセージ」として、子育ての工夫や励ましのコメント、プログラムに参加した感想などをカードに記入してもらい、写真と共に支援室の壁面に掲示した。また、参加者への情報提供および継続的な相互支援活動を展開するためのホームページを作成し、運営した。

プログラムの終了後の質問紙調査から、参加者の支援ニーズをまとめた。第2段階の継続支援プログラムは、主に乳児期後期の母子が対象であり、子どもの成長発達に伴って育児の悩みの内容が変化していた。特に、母乳育児と離乳食（補完食）の進め方についての相談が多かったため、ラクターションコンサルタント（IBCLC）の助産師を講師として講義および相談会を行った。母親たちは、育児雑誌や子育て経験者などから情報を得ている一方で、情報過多はかえって混乱を招く原因とも認識しており、個別の状態に応じた正しい知識を専門家に求めていた。また、核家族化により身近な相談者がいないことや、一昔前とは育児の最新知識や考え方が変わってきており実母と意見が食い違うなどの場合もあり、ちょっとした疑問や不安について気軽に相談できる場を求める母親たちの思いが意見に反映されていると思われる。また、子どもの成長・発達に関する相談も多く、小児看護学の専門家による育児相談やベビーサイン講師による教育講座を行った。少子化により乳児に接する機会が少ない現状の中で、同じ月齢あるいは少し先の成長・発達段階にある子どもたちを見ることによって自分の子どもの成長の道筋を実感できることや、他の母親の悩みや対処方法などの体験談を聞ける機会としても、この場を活用できたことは有意義であると考えられる。プログラムへの参加は母親仲間と再会する機会でもあり、それが参加を動機づける要因となっていた。また、既知の友人と一緒に参加することや共通の関心

をもつ仲間という安心感がグループダイナミクスに働き、初対面のメンバーともスムーズに交流が進み、近隣の育児支援サービスの情報交換や育児サークル等への参加を誘い合うきっかけになっていた。このような場から仲間とのネットワークが拡大・深化し、母親たちの主体的な参加により相互の支えあい広がっていくことが期待できる。参加者からは、今後の育児支援策への要望として、気兼ねなく子どもと一緒に外出でき、母親自身が安心して気分転換できる場を求める意見が多かった。本プログラムは、研究参加という形で対象者の募集とプログラムの提供を行ったが、安全な環境の整備や倫理的配慮を十分に行うことが前提である。さらに効果的に看護を実践していくためには、プログラムの充実と同時に、参加者のニーズにきめ細かく対応できる柔軟な運営が求められるだろう。本研究の参加者は、このような教育プログラムへの参加意欲が高く、積極的に資源を活用している対象であると言える。本プログラムを地域や施設などの育児支援の場で広く展開するには、それぞれの対象特性やニーズを考慮した工夫が必要である。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 前原邦江、森恵美、千葉大学「家族支援室」における育児支援活動の実践報告、千葉大学看護学部紀要、30、43-47、2008、査読有
- ② 前原邦江、産褥早期の授乳場面における母親の発話、千葉大学看護学部紀要、29、15-20、2007、査読有

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.oyakofureai.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前原 邦江 (MAEHARA KUNIE)
千葉大学・看護学部・講師
研究者番号：00302662

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：